

廣川和市教授退職記念号によせて

札幌学院大学人文学会長・人文学部長

奥谷 浩一

今年3月末日、本学人文学部長の要職を務められた廣川和市先生が定年をもって退職されて、同名誉教授とされました。その廣川先生の定年退職を記念するとともに、本学および本学人文学部にたいする先生の長年のご貢献に感謝して、本『人文学会紀要』第82号を同先生の退職記念号として刊行することになった。図らずも廣川人文学部長の後を継ぐことになった私から、一言巻頭言を述べさせていただきたい。

廣川先生は1939年新潟県三条市に出生された。お父上の北海道教育大学函館分校赴任と共に来道され、北海道大学教育学部と同大学院教育学研究科博士課程を修了された後、1968年4月に本学の前身である札幌短期大学に着任された。それ以来、先生は29年の長きにわたって本学の教育と研究に貢献されただけでなく、学内行政においても多大なご尽力をされた。先生は、私が本学に赴任した年の1976年に教授となられ、その翌年当時札幌商科大学に創設された人文学部の開設に尽力されたほか、学生部長、教務部長などの激職を歴任された。また2003年4月から2期4年間にわたって人文学部長を務められ、その間人文学部の第4番目の学科である子ども発達学科を創設された。そのほかに先生は人文学部長時代の前半の2年間は大学理事を兼務されてもいる。札幌商科大学創設後に教職員による自主管理という経営方式を取らざるをえなかった本学は、そのプラスの面をもちつつも、さまざまな点で教職員に負担を強いる体制でもあった。しかし、廣川先生は「明和体制」を作りこれとともに歩んだ教授陣の一人として、この負担に耐え抜き、誠実さと公平さをもって校務を全うされた。

廣川先生は研究の面では、北大名誉教授で本学でも教授を務められた故鈴木朝英先生を指導教授とし、大学院では教育史を専攻された。札幌短期大学に着任されてまもなくの頃から次第に学問的関心を、日本教育史上に名高い、群馬県佐波郡の島小学校での教育実践と教育思想で知られる斉藤喜博の研究に移されるようになった。そして、『事実と創造』や『斉藤喜博研究』などの雑誌に斉藤喜博にかんする数多くの論文を発表された。2003年11月には先生は、これらの斉藤喜博研究を集大成し、これまで培った蘊蓄を傾けて、『斉藤喜博新考—中期—「島小学校」期—の位置—』を信山社から出版された。この書は、斉藤喜博の教育思想を総体的に、つまりその教育活動の諸側面を総合的にとらえつつ、彼の生涯の各時期を全体的に把握することを意図して書かれた意欲的な研究であるとともに、教授学と教育史との統一的な研究として、また斉藤喜博理解の諸傾向にかんする批判的な分析として、斉藤喜博の研究者たちの間でも高く評価されていると聞き及んでいる。しかし、廣川先生によればこの力作は、斉藤喜博の教育活動

を方法論的に考察した「序論」であるに過ぎず、斉藤喜博の島小での学校作りに過程にかんする総体的・歴史的研究はこの書に続く続編の課題だそうである。先生には、本学を退職されて生じた潤沢な時間を有効に活用して、予告されたこの続編を早期に公表され、先生の長年にわたる斉藤喜博研究を是非とも完成していただきたいと念願する次第である。

ここで私事にわたる思い出を記すことをお許しいただきたい。

1977年4月に札幌商科大学に着任の予定であった私は、大学にたいする補助金が増額されるという財政上の理由で、予定よりも半年早い前年の10月に着任することになった。着任の挨拶のために札幌短期大学を訪れた私を最初に迎えてくださったのが廣川先生であった。先生は私を研究室に案内され、私は金属製のあの螺旋階段を上って先生の研究室でしばし閑談したのであった。先生の机のうえには驚いたことに、私が書いたヘーゲルの論文が掲載された雑誌が置かれてあり、哲学やヘーゲル研究にまで目配りを忘れない廣川先生の勉強ぶりと視野の広さに感心したものである。

そんな廣川先生であったから、確か先生が人間科学科長の時代であったと記憶するが、ある時大学運営にたいする日頃の不平不満と鬱憤を先生に聞いていただきたいと、小林好和先生、滝沢広忠先生と私の3人が福井にある先生のお宅にお邪魔したことがあった。私たちは廣川先生と奥様の淑子夫人の心からのおもてなしに気が緩み、その場の雰囲気がとても良かったことも手伝って、際限なく飲み喰い、かつ放言し、いつの間にか意識が薄れてしまったのであった。朝になって我に帰ると、私は何と滝沢先生と同じ布団の中におり、隣では滝沢先生がすやすやと寝息を立てていた。その日東京に出張する予定であった私は、奥様が作ってくださった心づくしの朝食をいただいてから、先生のお宅を後にしたのであった。これはほんの一例であるが、そんなわけで廣川先生ご夫妻には公私ともにずいぶんとご迷惑をかけ、またお世話になった。このことにも心から感謝申し上げたい。ちなみに、淑子夫人は廣川先生と大学院まで同窓であり、朝鮮教育史を専攻された方である。実は、私は廣川先生よりも先に淑子夫人と知り合いであった。というのも、私は大学院生の時代から北海道大学大学院教育学研究科でゼミナールを担当しており、淑子夫人はその最初の時期にこれに熱心に参加しておられたからである。

私は、いつも腹を割っていろいろなことを相談でき、私にとって何か兄貴分のような気がしてならない廣川先生から、奇しくも後任の人文学部長としてバトンを受けることとなった。受験生激減と大学全入時代の到来という私大をめぐる危機的状況のなかで、本学と人文学部にはさまざまな困難が降りかかっている。こうした困難に負けずに、廣川先生の理念と精神を受け継ぎながら、先生が切り開いて来られた人文学部の再編と内部充実という課題の解決のために鋭意努力していきたいと念じている。私たちにとってまことに幸いなことに、廣川先生は大学退職後、学校法人札幌学院大学の監事となられた。今後は学外からわれわれの大学の行く末を見守り、時には強くわれわれを叱咤激励していただきたいと期待している。

最後に、廣川先生が明和体制以来本学のために多大なご貢献をなされたことに深謝するとともに、今後ますますご健勝でご研究のさらなる目標を達成されますように、祈念して止みません。